赤十字新聞

The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication

■編集・発行／日本赤十字社　企画広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL.03-3438-1311
一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

9 Sep 2010

Vol.844 http://www.jrc.or.jp

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society

行って、見て、考えた 僕たち私たちにできること

青少年赤十字メンバーが国際交流

「自分たちの集めたお金が役立っているのを見て、これまで以上に1円玉募金の大切さを知りました」――青少年赤十字（JRC）のメンバー代表をアジア・太平洋諸国に派遣する国際交流事業が今年の夏も各地で実施されました。全国でおよそ130人の生徒が参加し、現地の人々との交流や支援事業の視察などが行われました。

①バングラデシュのＪＲＣメンバーと（千葉）②バングラデシュで手渡された文房具（千葉）③中国紅十字会のメンバーを受け入れ、記念植樹を行いました（石川）④今年で４年目を迎えるモンゴルへの派遣。モンゴルのメンバーの献身的な活動に胸を打たれました（愛知）⑤韓国・釜山からメンバーを受け入れ、教室での交流会や楽器演奏などさまざまな文化交流を行いました（福岡）

34年ぶりのバングラデシュ

国際交流事業は、青少年赤十字活動の一環として毎年行われているものです。

千葉県支部では7月24日から28日の日程で中高生8人をバングラデシュに派遣しました。

バングラデシュは、JRCメンバーの募金による「青少年赤十字活動資金（1円玉募金）」をもとにした教育等支援事業（※）の対象国の一つで、同国が中高生メンバーの派遣先となるのは34年ぶりです。

生徒たちは、教育等支援事業の対象校などを訪問し、集めた募金が現地でどう生かされているのかを学習。現地のJRCメンバーなどとの交流会では、地元千葉の「大漁節」を披露しました。

体験通じ考えた支援のあり方

バングラデシュへ生徒たちを引率した派遣団長の松戸市立第五中学校の稲積修校長は「国際理解や親善には、いろいろな国の人々と直接かかわることが必要。さまざまな体験を通じて考えていくことが大切です」と海外交流の狙いを話します。

市内では、物乞いの人々の姿に生徒たちはショックを受けたといいます。

帰国後の報告会では「そこでお金をあげることが、本当の助けになるだろうか」などの感想が。支援をめぐっては「同等の立場で進める視点が大事」といった意見が出されました。

稲積校長は「生徒たちは体験を通じて考えを確実に深めたと思います。体験に基づいた彼らの言葉は説得力を持ちます。その思いを周りの生徒たちに広げていって欲しい」と期待を語っています。

※バングラデシュ、モンゴル、ネパールの3カ国を対象に文房具などの配付、教育・衛生環境の改善、青少年赤十字活動の支援などを行っています。

悔しかったこと、うれしかったこと

仲間に伝えたい バングラデシュの体験

いすみ市立大原中学校 2年 石黒朱夏（いしぐろあやか）

到着翌日、日本では考えられない光景をたくさん目にしました。窓ガラスが割れたぼろぼろのバスが走っていたり、長すぎる電線がぐるぐるに巻かれていたり、道路にごみがいっぱい捨ててあったり。

物乞いの人にも会いました。言葉は分からなくても、お金を下さいと言っていることは分かりましたが、何もできずに悔しさが溢れてきました。貧しい国の現実を思い知らされました。

だけど、つらいことばかりではなかったです。交流会では、バングラデシュのみなさんの笑顔がとても輝いていて、「来て良かった！」と本当に感じました。日本では見られないようなその笑顔を見て、日本は裕福すぎて心から喜ぶことを忘れているのかもしれないと思いました。

学校訪問では日赤の支援で作られた花壇やトイレを見せてもらいました。私たちの募金が役に立っていることを知り、うれしかったです。

でも、この国には学校に通えない子もいます。私たちの募金で文房具配付も行われていますが、そうした支援でみんなが学校に通えるようになってほしいと思いました。

バングラデシュでの体験を通じて、日本がどれだけ裕福で幸せな国なのかを改めて感じました。同じ年でも一生懸命働いている子がいるという現状を日本の同世代の子にも伝えたいです。同時に、危ない、貧しいだけではなく、笑顔にあふれた国ということも伝えていければと思います。

「戦争は絶対にいけない」

元赤十字救護看護婦が戦争体験をこどもたちに

徳島県支部で「人道・平和」探検スクール

徳島県支部は8月15日、「親子で学ぶ赤十字『人道・平和』探検スクール」を同支部内で開催しました。終戦記念日に平和の大切さや人道について学ぶことを目的としたイベントで、今年で3回目の取り組みとなります。

参加したのは県内のJRC加盟小学校の5、6年生とその保護者の計40人。赤十字の役割や地雷について学ぶ講座に続き、非常食づくりやAED（自動体外式除細動器）を使ったレスキュー体験などさまざまなプログラムに挑戦しました。

鈴江さんは「人と人とが殺し合う戦争は絶対にいけない。今の平和な日本が続くよう、共に頑張っていきましょう」とこどもたちに訴えました

戦争体験を聞く講座では、第2次世界大戦で赤十字救護看護婦として中国北部の戦線に派遣された鈴江敏子さん（85歳）の話に耳を傾けました。

非常食作りにチャレンジ。保護者からは「（非常時に）温かいものが食べられる幸せを感じました」という声も

災害時の超急性期医療のレベルアップを

協働意識高める日赤DMAT研修会

災害救護のあり方が近年大きく変わりつつあります。発災から48時間以内の超急性期と呼ばれる期間にできる限り多くの命を救う救命医療に重点が置かれるようになってきたのです。日本赤十字社の救護活動もいっそうのレベルアップが求められています。その取り組みについて日赤本社の木村尚文救護・福祉部長に話を聞きました。

木村　尚文
救護・福祉部長

クラッシュ症候群など災害時に発生しやすい特殊病態の処置方法を学ぶ医師。災害時は専門外の処置を行う可能性もある

職種別に行われた実習。災害時に混乱しないためには訓練の積み重ねが必要

「かつて日本赤十字社など一部の医療機関のみが実施してきた被災地での医療活動は、日本DMAT（災害派遣医療チーム）の発足により大きな変化がもたらされました」

日赤の災害救護を担当する木村部長はこう語ります。

阪神淡路大震災では、超急性期に実施する救命医療が十分ではなかったため、救えるはずの命が救えなかったという反省がありました。このため国が主導して制度化されたのがDMATです。災害が発生すると即座に現場に駆け付け、被災現場での救命医療を担います。現在、多くの医療機関がDMATを中心とする災害救護に参画するようになりました。

ところが、日赤の使命であり歴史もある災害救護は近年、巡回診療や避難所での医療活動など発災後しばらく経ってからの段階に比重が置かれていました。そのため、超急性期の救命医療要請に十分応えられない恐れがでてきたのです。

「日赤には豊富な経験やdERU（移動式仮設診療所）をはじめとする救護装備など、数多くの財産があります。しかし、その財産にあぐらをかいていては、日赤は他団体から遅れを取ってしまいます」と木村部長は指摘します。

「日赤が持っているノウハウを他のDMATと共有していく一方で、超急性期医療については標準化されたDMATの知識や技術を活用するなど、これからの救護活動は周囲との綿密な連携が必要になってきます。DMATとともに超急性期医療のレベルアップを図ることが大切です」

平成21年から始めた日赤DMAT研修会は今年度中に8回を数えることになります。木村部長は研修の成果について、「医師、看護師、連絡調整にあたる職員などが互いの役割を十分に理解し、尊重しあう姿勢が生まれてきました。また、日赤以外のDMATとの協働が大切だという意識も着実に進んできました」と強調しています。

Our world. Your move.
赤十字150年

個人の尊重と赤十字運動（5）

元IFRC財政委員　野々山　忠致（ただゆき）

武力紛争下での一般住民の保護

武力紛争下でどのようにして一般住民を守るか。

『人道憲章』は、「戦闘員と非戦闘員の区別」がそのための基本的に重要な原則だとしています。この原則も赤十字の「個人の尊重」の理念から発展しました。戦争であっても無防備の一般住民は一人の人間として尊重しなければならないとしたのです。赤十字は、それを具体化するため、戦闘行為を行う戦闘員と一般住民を区別し、武器を持たない一般住民は攻撃の対象としてはならないとする原則を提案しました。特に、第二次大戦では、空襲や原爆による両者を区別しない無差別攻撃で多数の一般住民が犠牲になったことから、その実現に努力を重ねました。その結果、1977年のジュネーブ諸条約第一追加議定書で「一般住民と戦闘員とを常に区別し、軍事行動は軍事目標に対してのみ向けなければならない」とする原則が明文化されました。これは「軍事目標主義」と呼ばれ、条約に加入しているか否かに関係なく守らなければならない国際慣習法となっています。

アフガニスタンやパレスチナの戦闘で一般住民に犠牲者が出ると人々は当然のことのようにこれを非難します。しかし何故非難するのでしょうか。一般住民に対する攻撃が許されないのは、その基本に、武器を手にしていない一般住民は一人の人間として尊重しなければならないとする理念があるからです。第二次大戦中の日本は「国民皆兵」「一億玉砕」を叫び、国を守るためとして一般住民を戦闘に巻き込みました。そのため沖縄戦では住民10万人が犠牲になりました。それが何故許されないのか。そこに「個人の尊重」の理念のあることが理解されていないと、個人の犠牲を御国のためとして正当化する声が再び大きくなりかねません。

私たちが「テロ」に反対するのも「個人の尊重」の理念からです。テロとは何かについてはさまざまな定義がありますが、どれにも共通しているのは、それが一般住民を狙った攻撃だという点です。赤十字は、このような個人の尊厳を否定する行為は認められないとしてその禁止を訴えました。そこから「一般住民の間に恐怖を広めることを目的とする暴力行為や暴力による威嚇は禁止する」（追加議定書）とする原則が成立したのです。

武力紛争下で戦闘に直接関わらない一般住民や傷病兵、捕虜の生命と尊厳を守るための原則は、総称して「国際人道法」と呼ばれていますが、その基本にあるのは赤十字の「個人の尊重」の理念です。

ところで、こうした赤十字の努力にもかかわらず、一般住民に対する攻撃がなくならない現実を見て、「こんな理念や原則は無意味だ」と言う人がいます。次回は、この点について考えたいと思います。

日赤の災害看護教育実践

国内外の看護師養成に貢献

災害看護演習（救護訓練）

全国の看護大学・専門学校の看護基礎教育カリキュラムに今年4月から「災害看護」が必修の教育内容として加わりました。日本赤十字社が看護師養成を始めてから今年で120周年。日赤の活動で蓄積された災害看護の経験は赤十字看護師養成にフィードバックされてきましたが、その教育実践にいま注目が集まっています。

災害看護のカリキュラムへの追加は、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」の改正（平成21年4月）に伴う措置。看護師教育に「災害直後から支援できる看護の基礎的知識について理解する内容」が付加され、今年4月から実施されたものです。

今年1月には、赤十字の教職員が執筆した「災害看護学・国際看護学」（医学書院）が出版されました。すでに全国の看護師養成機関に8000冊が購入されており、今後も部数は増える見込みです。

日赤の災害看護は国内だけでなく、海外でも貢献しています。平成16年のスマトラ島沖地震で被害を受けたインドネシアのバンダアチェ州では、4つの看護学校に災害看護教育の支援を行いました。日本語から英語、英語からインドネシア語に訳された災害看護学の教科書も平成21年に出版、活用されています。

キャンプで深めた里親家族の絆

富山県里親支援機関事務局が研修担当

和気あいあいの雰囲気が楽しかった花台作り

富山県内の里親家族で作る「里親会」主催の交流体験活動（キャンプ）が7月31日から8月1日の2日間、東福寺野自然公園（滑川市）で開かれ、約40人の里親家族が参加。日赤富山県支部が開設している「富山県里親支援機関事務局」がキャンプ中の研修部門を担当しました。

何らかの理由で実の親と一緒に暮らせないこどもを家庭で預かり、家族として生活するのが里親制度。富山県内には56組の里親家族がいます。研修では里親家族のきずなを深める体験活動として、1日目に親子スキンシップストレッチ体操教室、2日目には木工教室を実施しました。

猛暑のなか、汗を流しながらの教室となりましたが、こどもたちは笑い声を響かせて元気いっぱい。ミニ花台作りに取り組んだ木工教室では、上手に釘を打つ父親の姿をこどもたちはまぶしいまなざしで見つめていました。

キャンプのなごやかな雰囲気の下、里親としての経験談や喜び、悩みなどの意見交換も行われました。

もう出した？「いのちと献血俳句コンテスト」応募締切迫る！

「ピカーッ」と一句浮かんだかな？

俳句を通じて献血やいのちの大切さを伝えていくことを目的に日本赤十字社では「第5回いのちと献血俳句コンテスト」を開催中です。

6月15日にスタートした今年度の俳句コンテストでは、全国6会場（北海道・宮城県・東京都・福井県・岡山県・大分県）で街頭キャラバンを実施。また、夏休みなどに各地で開催された親子献血教室にも俳句コンテストキャラクターのピカチュウが登場し、応募を呼びかけました。

応募締切は9月30日。家族や友達と楽しみながら一句ひねってみませんか。

応募方法など、詳細情報はウェブサイト、または電話でお問い合わせください。

〈PC・携帯〉http://www.ken-haiku2010.jp/

〈電話〉048－485－2395（午前10時～午後5時、土・日・祝日を除く）

理事会審議報告

平成22年7月16日、理事会に文書による付議が行われました。

審議結果は左記のとおりです。

記

付議事項

1 予算の補正について（ハイチ、チリ、中国青海省大地震災害救援金にかかる一般会計歳入歳出予算の補正、熊本赤十字病院の土地の取得にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正）

今回の審議は、予算の補正の時期の関係から文書をもって理事会に諮られましたが、理事会の構成役員（社長、副社長及び理事）現員62人のうち、59人から回答が寄せられ、59人全員が賛成しましたので、平成22年8月9日付で原案のとおり議決されました。

中国、パキスタンの豪雨被害への救援金募集

中国では5月から続く記録的な豪雨で洪水や土砂災害が相次ぎ2億人以上が被災。8月8日には甘粛省甘南チベット族自治州を襲った大規模な土石流により死者・行方不明者1700人以上という被害が発生しました。

パキスタンでは7月下旬から8月上旬にかけての豪雨により発生した洪水・土砂崩れで死者1500人、被災者1600万人以上の被害に見舞われています。（8月24日現在）

被災された方々への救援金にご協力をお願いします。

①中国豪雨災害
・名称　中国豪雨災害
・受付期間　平成22年9月30日（木）まで

②パキスタン洪水被害
・名称　パキスタン洪水災害救援金
・受付期間　平成22年10月31日（日）まで

受付口座は①②の救援金とも共通です。

■郵便振替口座　00110－2－5606

■加入者名　日本赤十字社

※振替用紙の通信欄にそれぞれの名称を明記してください。受領書を希望される方は、振替用紙の通信欄に「受領証希望」と明記の上、お名前、ご住所、お電話番号を記載してください。

※郵便局窓口での取り扱いの場合、送金手数料は免除されます。

※銀行口座でも救援金を受け付けております。詳しくは日赤ホームページをご覧ください。

平成23年度　赤十字看護専門学校および助産師学校の入試日程

あなたも赤十字の教育施設で学びませんか？

私たちは、赤十字の基本原則である『人道』を基盤に、社会の要請に応える、豊かな人間性と看護・助産に関する幅広い能力を兼ね備えた実践者を育成しています。病院での実習には、赤十字病院を確保し、指導体制を整えて質の高い教育をご提供いたします。

卒業生の8割以上が赤十字病院に就職しておりますが、看護大学へ編入する人もいます。

看護専門学校

地域	学校名	募集人数	入試区分	試験日（一次）	試験日（二次）	合格発表（一次）	合格発表（二次）	連絡先
北海道	伊達赤十字看護専門学校	30	推薦 一般	H22年11月5日 H23年1月20日・21日		H22年11月10日 H23年1月25日		0142-23-2350
	浦河赤十字看護専門学校	30	推薦 一般	H22年11月11日 H23年1月20日	H23年2月4日	H22年11月下旬 H23年1月26日	H23年2月10日	0146-22-1311
宮城県	石巻赤十字看護専門学校	40	推薦 一般	H23年1月21日	H23年2月4日	H23年1月24日	H23年2月7日	0225-92-6806
埼玉県	さいたま赤十字看護専門学校	40	推薦 一般	H22年11月19日 H23年1月23日	H23年1月25日	H22年11月30日 H23年1月24日	H23年2月2日	048-852-7927
千葉県	成田赤十字看護専門学校	30	推薦 一般	H22年11月9日 H23年1月22日	H23年1月25日	H22年11月16日 H23年1月24日	H23年2月2日	0476-22-3000
新潟県	長岡赤十字看護専門学校	50	推薦 一般	H22年11月1日 H23年 1月18日・19日		H22年11月 5日 H23年1月31日		0258-28-3600
長野県	長野赤十字看護専門学校	40	委託 一般	H22年11月5日 H23年2月3日・4日		H23年2月10日 H23年2月10日		026-226-4826
	諏訪赤十字看護専門学校	40	推薦 一般	H22年11月2日 H23年1月6日		H22年11月19日 H23年1月14日		0266-57-3275
富山県	富山赤十字看護専門学校	40	推薦 特別選抜 一般	H22年11月4日 H22年11月4日 H23年1月 6日・7日		H22年11月17日 H22年11月17日 H23年1月 26日		076-442-0844
滋賀県	大津赤十字看護専門学校	40	推薦 一般	H22年11月12日 H23年1月 14日		H22年11月30日 H23年2月1日		077-522-9646
京都府	京都第一赤十字看護専門学校	40	推薦 特別選抜 一般	H22年11月18日 H22年11月18日 H23年1月18日		H22年11月30日 H22年11月30日 H23年1月31日		075-533-1269
	京都第二赤十字看護専門学校	40	推薦 特別選抜 一般	H22年11月18日 H22年11月18日 H23年1月18日		H22年11月29日 H22年11月29日 H23年1月31日		075-441-2007
大阪府	大阪赤十字看護専門学校	50	推薦 一般	H22年11月17日 H23年1月22日	H23年1月26日	H22年11月26日 H23年1月25日	H23年2月2日	06-6774-5164
兵庫県	姫路赤十字看護専門学校	40	社会人 一般	H22年11月6日・13日 H23年 1月19日・20日		H22年11月19日 H23年2月4日		079-299-0052
和歌山県	和歌山赤十字看護専門学校	50	推薦 一般	H22年11月19日 H23年1月20日	H23年1月21日	H22年11月26日 H23年1月21日	H23年1月26日	073-422-4171
岡山県	岡山赤十字看護専門学校	40	推薦 特別選抜 一般	H22年10月2日 H22年10月2日 H23年1月19日・20日		H22年10月6日 H22年10月6日 H23年1月26日		086-223-6800
愛媛県	松山赤十字看護専門学校	40	推薦 一般	H22年11月9日 H23年1月25日	H23年1月28日	H22年11月19日 H23年1月27日	H23年2月3日	089-924-1112

助産師学校

地域	学校名	募集人数	入試区分	試験日（一次）	試験日（二次）	合格発表（一次）	合格発表（二次）	連絡先
東京都	日本赤十字社助産師学校	40	推薦 一般	H22年11月22日 H23年1月7日		H22年12月1日 H23年1月20日		03-3400-0112

☆募集要項については各校へお申し込み下さい。また、日本赤十字社のホームページ（http://www.jrc.or.jp/nurse/search/senmon/index.html）から各校のホームページをご覧いただけます。

赤十字新聞 THE RED CROSS JOURNAL （第三種郵便物認可） 第844号

みんなでつくろう 災害に負けない地域社会

災害時、特に避難所などでの高齢者への接し方

災害が人に及ぼす影響はさまざまですが、特に高齢者の場合はからだが不自由であったり、一人暮らしで家族の援助が受けられないことなどがあり、より影響を受けやすいといわれます。

高齢者には温かい態度で接することを心がけるとともに、高齢者の考えを尊重し、尊厳を守ることを忘れてはいけません。

高齢者が、やがて落ち着きを取り戻し、自信と自尊心を回復され、普段の生活に近づくことができるよう支援することが大切です。

○一人にしないで、接する機会をなるべく多くもつ。
○高齢者のペースに合わせて、ゆっくりと対応する。
○親身になって話を聞く。
○相手の感情をありのままに受けとめ、むやみに励まさない。
○話したくないときは、その気持ちを尊重する。
○高齢者自身が持っている知恵と知識を生かすような働きかけをする。一緒にできることを探す。しかし、無理強いはしない。
○避難所生活に不自由がないか留意する。（常用薬、眼鏡や入れ歯、補聴器、歩行補助具が揃っているか、移動、食事、洗面や着替え、排泄等で介助が必要かどうかなど）
○生活支援の基本は自立支援であり、高齢者ができないところを援助する。できることは自分で行えるよう、温かく見守る。
○からだやこころの健康状態に異常を感じたときは、「救護所」や「こころのケア」要員などに相談するよう勧める。一緒に付き添って行くこともよい。

7月中旬に広島・山口を襲った大雨被害。集まったボランティア達が、リーダーの調整のもと迅速に壊れた家財道具などを運び出す

日赤は全力で応援しています

明日起きるかもしれない大地震などの災害。その時、自分と家族、地域社会を守る防災の主人公はあなた自身です。日本赤十字社では、市民一人ひとりが災害時に力を発揮できるよう防災ボランティアの養成に力を入れています。なぜ、行政などの組織任せではなく、ボランティアが必要なのか。災害時のボランティア研究をしている識者と防災ボランティアとして活動中の3人に話を聞きました。

インタビュー あなたにもできます 災害ボランティア

大阪大学大学院人間科学研究科 教授 渥美（あつみ） 公秀（ともひで）さん

社会に根付いた災害ボランティア

阪神淡路大震災から15年を経て、災害ボランティアは一過性のブームではなく、日本社会にしっかり根をおろした存在になってきました。災害発生時にはボランティアが駆け付け、被災者支援を行う姿が当たり前になっています。

その活動についても、阪神淡路大震災のころに比べると機能的、効率的になってきました。被災地では、ボランティアの受け入れや活動の調整を行う社会福祉協議会の災害ボランティアセンターがすぐに立ち上げられるようになってきています。被災地のニーズを整理し、続々と駆け付ける ボランティアに、どこで何をしてもらうのかをきちんとコーディネートできる仕組みが準備されているのです。

効率化で見えなくなる被災者

一方、効率化の追求による弊害も見えてきました。

ボランティアセンターというのは、支援のための手段であるはずです。ところが、この組織を効率的に動かすことそれ自体が目的化してしまい、本来の目的である被災者支援を見えにくくしてしまうこともあります。

具体的な例としては、個々のボランティアが被災者と接することが重視されずに、その機会が減ってきている点が挙げられます。直接被災者と会うことだけが災害ボランティアの役割ではありませんが、被災者のことが分からないと支援の方向がずれてしまうのではと危惧しています。

例えば、地震や水害でむちゃくちゃになった家の中を片づける活動を考えてみましょう。効率的な作業で早く片づけは、それは被災者のためになると思われるかもしれません。

しかし壊れた一つひとつの物には、その被災者の思い出が詰まっているかもしれない。それを片づ端から片付けたりしてしまえば、心を痛める被災者がいるかもしれない。効率だけでは本当の被災者支援にならないことも、私たちは考えなければならないのです。

寄り添うこと、思いを巡らせること

被災された方々の心の痛みや苦しみに共感すること。実はボランティアの役割は、ここにこそあるのではないでしょうか？

そのためには、一人ひとりの被災者に直接会って、何に困っているのかが分からなければならない。制度的な支援ではどうしても抜け落ちてしまう部分があります。でも抜け落ちて良い生活なんてありません。一人ひとりにじっくりと向き合っていくのがボランティアに課せられた使命だと思うのです。

必ずしも具体的な作業を伴う必要はありません。被災者のそばに寄り添い、彼らの話を聞いてみる。その悩みや苦しみに思いを巡らせるだけでも、十分にボランティアとしての役割を果たしているのです。

ですから、〝自分は専門的な能力がないから被災地で役に立たない〟という心配は無用です。被災者のために何かをしたいという気持ちさえあれば、誰でも災害ボランティアになれるはずです。

また、現場に行くことでたくさんのことが学べます。私は学生と一緒に被災地に行くこともありますが、被災地でのボランティア活動を経験した彼らの成長は楽しみですね。

ある学生は、これをきっかけに自的意識を持ってもっと専門の勉強をがんばろうとするでしょう、それぞれが自分なりに体験を整理して、次のステップにつなげています。

災害ボランティアに社会の一押しを

災害時のボランティアって自分が行くだけではないんですよ。災害NPOの中には活動資金確保などに大変な苦労をしている団体が少なくありません。

被災地で活動をしたくても、十分な資金がなくてできないというケースもあるのです。そういう組織を応援するのも立派なボランティア活動ではないでしょうか。

被災者のために何かをしたくても、仕事や家庭の事情でボランティアはできないという方は、ぜひ、災害NPOなどに寄付をお願いしたいと思います。

また、社会の側も災害ボランティアをもう一押し応援する体制を整えて欲しいですね。

すでに行っている企業もありますが、災害ボランティア活動を希望する社員がボランティア休暇を活用しやすくする環境作りもその一つです。

こうしたことを実行するためには、企業が日常的に地域のNPOと付き合い、その活動や組織を理解する努力が大切だと思っています。

広げてほしい赤十字の経験と知識

赤十字には、災害支援に関する多くの知識や経験があります。その財産を他の災害ボランティア、NPOの方々にも広げていく努力をもっとしていただければ素晴らしいですね。

実際の被災地では、他のボランティア団体、NPOと赤十字は分かれて行動することが少なくないんです。法律的にも赤十字は災害救護の任を負っている団体ですし、規模もいろいろですから、他の団体とうまくやっていくのは難しいかもしれません。

でも、他の団体のボランティアが日赤さんと一緒に行動する機会が増えたり、会議で意見交換のチャンスが与えられれば、お互いにたくさんのことを学ぶことができるはずです。

そうした現場での協働を広げる取り組みをぜひ期待したいと思っています。

奉仕団だからこそできた「顔が見える」支援活動

宮城県 栗原市地区
栗駒赤十字奉仕団委員長 小林 ふささん

団員81人からなる私たち栗駒赤十字奉仕団は、「宮城県沖地震」が発生したケースを想定した防災訓練に取り組んでいます。「市が主催する「健康まつり」では、炊き出し訓練などを実施。栗駒を構成する6つの地区で開催される防災講習会にも参加し、消火訓練やAED（自動体外式除細動器）講習などを積み重ねています。

今から2年前の平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震で、救援活動者への炊き出しなどに取り組みました。緊急時にこうした対応ができたのは、日ごろの訓練があればこそです。

岩手・宮城内陸地震の際、避難所で食事の準備をする栗駒市の赤十字奉仕団

訓練が育んだ地域ネットワーク

市役所から奉仕団に炊き出し要請があったのは地震発生翌日の午前10時。日ごろから連絡を密に取り合っていることもあり、45分後には団員16人が集合し、豚汁とキノコ汁をつくる作業を開始しました。気温が高く、汗をびっしょりかきながらの作業でしたが、不平をいう人は誰もいなかったですね。あっという間に仕上げました。午後とその翌朝にもさらに400食を作りました。

自分たちも自宅に被害を受けていましたが、37日間におよぶ活動に参加した奉仕団員はのべ285人。これだけ多くの人が加わったのは、訓練で育んだ人と人とのつながりによるところが大きいと思います。

防災ボランティアリーダーとして被災者ニーズのアンテナに

日本赤十字社神奈川県支部所属
防災ボランティアリーダー 柳原（やなぎはら） 孝美（たかみ）さん

日赤の救急法講習会などを修了し、防災ボランティア※に登録された方は神奈川県だけで2万人。高校生から70代までの幅広い人が、その人の体力や時間的余裕に応じて参加しています。

「防災ボランティアって何をするの？」と疑問に思う人も少なくないかもしれません。実は、防災ボランティアは、災害時に自分と家族などの安全を守るのがまず第一義的な任務です。負傷した人が周りにいたら、救急法の知識や技術を用いて、容態がそれ以上悪化しないよう処置をするなどの活動が期待されています。

また、被災者ニーズをキャッチするアンテナとしての役割も大切です。さまざまな被災者ニーズの中で、「これは自分たちでできること、この部分は外部に支援をお願いしよう」などと判断し、地域のボランティアセンターとの連絡役を務めることが求められると思います。

もちろん、県支部と地域の奉仕団が行う救援活動にも、積極的に参加し、力を発揮してほしいと願っています。

地域に出てつながっていこう

日赤の特色は地域に開かれた組織であること。救急法講習会や防災ボランティアの研修会は誰でも参加できます。もっと多くの方に受講していただき、防災ボランティアに手を挙げていただきたいですね。

ただ、せっかく覚えた救急法などの知識も、1回だけの講習では時間とともに忘れてしまいます。定期的に防災訓練や研修会に参加することが必要です。こうした継続的な活動に参加される方の中から、さらに地域の活動の中心となる防災ボランティア地区リーダーが育っております。

防災活動は赤十字だけがやっているのではありません。防災ボランティアや地区リーダーなどには、地域のさまざまな防災活動にもどんど参加してほしいと思っています。

地域での人間関係をつくることが、いざというときの活動へと生きてくると考えています。

※防災ボランティア……日本赤十字社では、奉仕団とは別に、災害時に活動を希望する個人や団体を「防災ボランティア」として登録しています。

被災体験乗り越えて活動に参加

神戸青年赤十字奉仕団 宗（むね） 沙弥香（さやか）さん

昨年8月に兵庫県北西部を襲った台風9号。私は初めて赤十字防災ボランティアとして、被災した佐用町の復旧活動に加わりました。

参加の動機となったのは、阪神淡路大震災での体験です。いきなりの揺れに6歳だった私は事態を把握できず、父が叫ぶ「毛布をかぶって、頭を守れ！」という指示にただ従っていました。幸い家族は全員無事でしたが、避難所での生活は辛かったです。水みみに2時間並んだり、トイレが臭くて何日も我慢したり。お風呂にいたっては丸1週間も入れませんでした。佐用町の被害を聞いた時、被災時には高齢者への声かけも大切な活動でした。震災の3日目でしたが、駐在さんから「奥地で一人暮らしをするおばあさんに、集会所への避難を説得してほしい」と頼まれたんです。余震も心配でしたからすぐ訪ねて、明朝からの入所の約束を取り付けました。

大きな亀裂が入り、傾いてしまった家にとどまっていた2軒8人の方にも、いつ倒壊しておかしくない状態を伝え、同行した駐在さんとともに説得にあたりました。

こうした「顔が見える」説得は地域に根ざした奉仕団ならではのこと。行政ではなし得ない被災者本位の活動です。

救護の技術向上はもちろんですが、地域に求められるのは顔の見える人間関係だと思います。これからもコミュニケーションを大切に訓練に励んでいきます。

防災ボランティアによる佐用町の復旧活動

チームの連携が喜びを生んだ

実際に現地の状況を目の当たりにし、あらためて自然災害の怖さを思い知りました。河川はんらんした影響で、辺りは流木と泥で埋め尽くされていたのです。

すでに住民による復旧活動が始まっており、私たちは高齢者夫婦が住む家の片付けを担当することになりました。限られた時間での作業は、やるべきことを的確に見つける広い視野が求められました。行き届かないところは、仲間とのコミュニケーションで補い合います。それによりチームワークが深まり、自分自身も達成感や充実感、喜びを感じることができました。

活動を通じて学んだことは、日ごろからの備えの大切さです。災害はいつどこで、どんなふうに起こるかかりません。食料・水・服などはもとより、いざというときにパニックにならないように普段から意識を高めておくことが必要だと感じました。

これからも青年奉仕団が実施する災害についてのプログラムに積極的に参加して知識を増やし、活動に生かしていきたいと思います。

Sports スポーツとコラボ

巨人軍の赤十字支援プロジェクトに参加

長野

7月27日に長野オリンピックスタジアムで行われたプロ野球・巨人対中日戦で赤十字PRイベントが開催されました。

読売巨人軍による「赤十字支援プロジェクト」は一昨年からスタート。今年はジャイアンツ主催の遠征試合でもPRイベントが実施されています。

特設ステージG－KINGでは、赤十字活動を紹介し、赤十字への協力を呼びかけました。また、赤十字支援リーダーの坂本勇人選手がデザインした「赤十字コラボTシャツ」の即売会と坂本選手直筆サイン入りポスターの抽選を実施しました。

Tシャツを購入したファンからは、「赤十字のために役立てていただければ嬉しい」との声があがりました。

赤いTシャツで球場の外も熱気！

赤十字 夏の主人公はこどもたち

仲間と学び輝いたJRCのトレセン

集団生活と体験学習のなかで、赤十字思想やボランティア精神、リーダーシップなどを学ぶ場が青少年赤十字（JRC）のトレーニング・センター（トレセン）です。今年の夏も全国で開催され、小学生から高校生まで大勢のJRCメンバーが参加。自ら考え、行動するさまざまなプログラムを通じてたくましく成長しました。

口蹄疫被害への激励・支援を討議

和歌山県支部は8月16、17日の2日間、今年で59回目となるトレセンを和歌山市立少年自然の家で開催しました。

参加したのは、県内のJRC加盟校の生徒59人（小学生・高校生）と指導者など合わせて約100人。

高校生のグループタイムでは宮崎県に被害をもたらした口蹄疫についての学習を行いました。宮崎県JRCは口蹄疫被害の激励活動に取り組んでいて、全国のJRCにも激励の支援を要請しています。今回の学習企画はこの要請を受けたものです。宮崎県支部から口蹄疫についての話や宮崎県JRC活動の報告を聞き、自分たちが取り組める激励や支援の方法について話し合いました。

「金銭だけではなく、心のこもった激励はできないだろうか」「和歌山で起こった場合、自分たちには何ができるだろうか」などの活発な意見が出されました。また「宮崎県JRCの活動を聞き、力をもらいました。私たちも身近なボランティア活動を積極的に行いたい」といった声も聞かれました。

このほか、ハイチ大地震での救護活動体験を聞く国際活動の学習やロープワーク、フィールドワークなどに挑戦しました。参加したメンバーの一人は「今回のトレセンを通じて、普段から自分でできることがないかに気づき、考えることが大切だと分かりました」と感想を話しています。

「災害時の避難所体験」が今年のメインプログラム。夕食は非常食、寝る場所は会議室をダンボールで間仕切りして作りました（北海道）

健康安全プログラムとして、三角巾の使用法やAED（自動体外式除細動器）による心肺蘇生法を学びました（岩手）

ロープワークにも挑戦しました。ヒモが絡まって、頭もこんがらがってしまわないように！（和歌山）

今年は香港から来日した小学生メンバー7人が初参加。はじめは言葉の壁に戸惑いましたが、次第に仲良しになりました（福岡）

視野を狭めるゴーグルを着用した高齢者疑似体験や手話体験などを通じて、それぞれの立場で考えることの大切さを学びました（長野）

目隠しでの歩行体験は、ハンディキャップを持つ人々のことを考えるきっかけになりました（愛媛）

大人になったら献血したい

楽しく学んだ親子献血教室

将来の献血を担うこどもたちに献血の大切さを学んでもらおうと、各県の血液センターではさまざまな企画を夏休みに実施。大勢の小中学生と保護者が参加しました。

8月2日にポートプラザホテルちば（千葉市中央区）で「親子で献血クッキング」と題したイベントに取り組んだのは千葉県赤十字血液センター。食事づくりを通じて、血液と栄養の関係などを学んでもらう企画です。

児童・生徒32人と保護者26人が参加し、ホテルシェフの指導の下、貧血に効果のある鉄分をたくさん含んだ鶏レバーを使った「鶏レバーのパテ」調理に親子で挑戦しました。（写真右上）

美味しく食べて健康づくりが献血の第一歩！（千葉）

「本当に注射するの!?」とドキドキ。「注射は嫌いだけど大人になったら困っている人のために献血したい」とうれしい感想が（熊本）

3日間で105組265人の親子が参加。「こどもたちに命の尊さを知って欲しいと参加しました」という保護者も（広島）

献血について学んだ後は、福井市赤十字奉仕団の指導で非常食の炊き出しに挑戦しました（福井）

家族連れもカップルも 80人が心肺蘇生法体験

宮崎

宮崎県救急安全赤十字奉仕団宮崎地区（深田勝廣委員長）は「水の日」の8月1日、宮崎市のサンビーチ一ツ葉で海水浴客を対象に心肺蘇生法の紹介を行いました。

「カレシが溺れたときはまかせて！」

参加したのは、小さなこども連れの家族やカップルの男女など約80人。海水浴場での呼びかけにその場で集まった参加者は、人工呼吸や胸骨圧迫の仕方、またAEDの使用方法などを体験しました。

企画した深田委員長は「初企画でしたが多くの人がチャレンジしてくれました。救急法や幼児安全法を身近に感じてもらうため、今後も体験の場を広げていきたい」と話しています。

赤十字ジュニア 救護隊に〝任命〟

阪大

大阪府支部は7月31日と8月1日の2日間にわたり、夏休みと冬休みの恒例行事「親と子の防災セミナー」を大阪赤十字会館で開催。各日40組の親子が参加しました。

ストッキングを使った応急手当を教える防災ボランティア

地震の仕組みや家庭でできる地震への備えなどの学習に続けて、身近なものを使った骨折固定などの応急手当を実習。災害現場シミュレーションでは、声をかけ合いながらの救護を体験しました。

セミナー終了後、小学生の参加者には「赤十字ジュニア救護隊」の修了証が渡されました。なお、セミナーの全プログラムは防災ボランティアが中心となって進められたものです。

常陸宮妃殿下ご臨席のもと大会開催

北海道

第29回赤十字北海道大会が8月4日、日本赤十字社名誉副総裁の常陸宮妃殿下ご臨席のもと、江別市民会館で開催されました。

式典では常陸宮妃殿下から有功章が社資功労者に授与。

大会には全道各地から約1000人の社員やボランティアが参加

紺綬褒章が北海道知事から、厚生労働大臣感謝状及び社長感謝状が近衛社長からそれぞれ贈呈されました。

大会に先立ち同会場では、伊達・浦河赤十字看護専門学校生によるキャンドルサービスや赤十字関係物故者慰霊祭も行われました。

クローズアップ ひと

日本赤十字社参与 田島 弘さん

赤十字ファンを育てたい

日本赤十字社入職58年を迎えた田島弘さん（77歳）。その名前を知らない人も、田島さんが作った「山賊の歌」には親しんだ経験があるはずです。

♫ 雨が降れば小川ができ～

このキャンプの定番ソングは、田島さんが参加した青年赤十字奉仕団活動のなかで生まれたもの。「訪問していた福祉施設で山賊が登場する劇をやることになり、歌詞を書いたんですよ。レコード化もされたんですよ」と当時を懐かしみます。

その後、神奈川県支部に入った田島さんは昭和52年に本社へ異動。さまざまな仕事に携わりましたが、青少年課長時代にJRC加盟校の多くの先生と出会えたことが特に思い出深いと振り返ります。

「僕自身も高校時代にJRC部でした。その活動を通じて『自分の役立つ場が赤十字にはある』という感動を体験したことが、今日まで赤十字人としてやってこられた力になっています。だから、本気でJRC活動に頑張る先生との交流はうれしかったですね」

皇后陛下にナイチンゲール記章についてご説明する田島さん

広報室長として皇后陛下や故ダイアナ妃、各界の著名人などダイアナ妃が『被災地上空を飛ぶヘリコプターの音で、地上の救援活動に支障はでていないですか』など具体的な質問をされたのが印象に残っています。本気で被災者を案じていることに感動しました」

平成10年に退職後、参与に。平成17年の「愛・地球博」では赤十字パビリオン副館長を務めました。紛争犠牲者や災害被災者の姿をMr. Childrenの名曲「タガタメ」に乗せてスクリーンに映し出す企画は大きな話題になりました。

「歌手の氷川きよしさんも来場しました。彼は見終わった後、しばらく考えて『僕は僕の歌をもって人の役に立ちたいと思います。これからも』と。心を打つ言葉でしたね」

現在は参与として情報プラザに籍を置き、訪れた奉仕団員や修学旅行生などを案内するボランティアを務めています。

「赤十字の事業は〝人〟によって行われます。だから人づくりが大切なんです。情報プラザに展示している赤十字の歴史とともに赤十字の魅力を伝え、一人でも多くの赤十字のファンを育てたいと思っています」

知事先頭に献血キャンペーン

徳島

夏場の輸血用血液の不足を呼びかける「学生赤十字奉仕団献血キャンペーン」に、徳島県支部長の飯泉嘉門県知事が参加しました。飯泉支部長は学生と共に街頭での呼びかけを行い、献血にも協力しました。

飯泉支部長は献血制限の一つである「英国渡航歴」があったため、これまで献血ができませんでした。しかし、このほど英国渡航歴の制限緩和が行われたことを機に献血。自ら献血することで、渡航歴緩和を多くの方に知ってもらうことも目的です。

「献血は快適でした」と笑顔の飯泉支部長

「献血をしたいと思っても今までできず、歯がゆい思いをしていた。協力できるようになってよかった」と飯泉支部長は話しています。

心からの寄付に感謝

故人の遺志継ぎ 高額寄付

福井

福井県あわら市の病院関係者から8月12日、亡くなられた患者さんの遺志に基づき500万円の寄付が福井県支部へ寄せられました。

亡くなられたのは病院で長期療養されていた三村たみ子さん。生前、「世のために役立ててほしい」と財産の遺贈を希望されていました。

前田清作事務局長は「故人のお心を酌み、遺志に背くことなく、赤十字事業に役立てます」と心からの感謝とご冥福をお祈りしました。

小学生が早朝募金を寄付

大阪

守口市立大久保小学校の児童たちから7月21日、赤十字事業資金として1万6416円が大阪府支部に寄せられました。

今回の募金は、児童たちが早朝の校門前で友達や先生に呼びかけて集めたもの。児童の代表者からは「苦しんでいる人を助けてほしい」とのメッセージも寄せられました。

本資金は災害救護活動、国際活動などの活動資金として有効に活用していきます。

守口市立小学校の代表6人と大阪府支部樋口振興部長（右）

Voice&プレゼント

◆自分や家族がその立場になったら…
――匿名希望（山口市）

松江市の松本真由さんの体験発表が印象深かったです。自分や家族、知人がその立場になったらと考えさせられました。真由さんのお話を胸にこれからも献血を続けたいと思います。

◆語り続けてほしい原爆の恐ろしさ
――匿名希望（広島市）

原爆病院の記事を読み改めて原爆の怖さを感じました。原爆病院がこれからも歴史の証人として、原爆の恐ろしさを世界中に語り続けていってほしいと思います。

プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵な赤十字グッズをプレゼントします。

☆今月号のプレゼント
応急手当セットを
３名様に。

●郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社企画広報室 赤十字新聞係
●fax/03-3437-7091
●メール/koho@jrc.or.jp
（件名「赤十字新聞９月号プレゼント応募」）
★ご投稿の際は、お名前、連絡先（住所・電話番号）を明記してください。匿名希望の際はその旨もご記入ください。
当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

9月の行事予定

開催日	行事名	開催場所	問い合わせ先・備考
9月1日（水）	まいどなんば献血ルームオープン	大阪府・まいどなんば献血ルーム	まいどなんば献血ルーム ☎06-6649-2277
9月1日（水）	プロ野球公式戦 9/1 巨人VSヤクルト・9/10 巨人VS広島（ステージG-KING赤十字イベントコーナー）※グッズが当たる抽選会受付は14時から、イベントコーナーは15時開始	富山アルペンスタジアム	日赤富山県支部 ☎076-441-4885
9月10日（金）		HARD OFF ECOスタジアム新潟	日赤新潟県支部 ☎025-231-3121
9月11日（土）・12日（日）	第25回 日本国際保健医療学会学術大会	福岡県・日本赤十字九州国際看護大学	事務局 ☎0940-35-7053

チリ大地震から半年

ボートの配付で生活再建へ

WORLD NEWS

今年２月27日に起きたチリ大地震（マグニチュード８．８）は死者512人、行方不明者56人、被災者約200万人、倒壊家屋10万棟以上の大きな被害をもたらしました。発災から半年、地震の傷跡はいたるところに残っていますが、町は少しずつ復興し、人々の間に笑顔も戻ってきました。７月から派遣されている秋元陽子駐在員の現地リポートを紹介します。

漁業組合長、チリ赤十字社職員と協議する秋元駐在員（右）

1800家族を事業対象に

ボート・船外機供与

秋元さんが最初に訪問したのは、津波被害が特に深刻だったタルカワノという漁村。

「あちこちで船の修理やビルの工事が行われていました。仮設住宅も目立ちます。地震の後、建築関係の仕事が増え、その意味では町は活気づいているようにも見えます」と秋元さん。「女性たちのパワーも感じました。町おこしの観光業を企画したり、災害に強い町づくりを力説する女性たちにも出会いました」と被災地の様子を語ります。

修理されないままの漁民の家

しかし、津波被害が深刻だった漁業関連の復興はこれからです。被災者の中には、流されてしまった船が戻っているかも知れないと、浜辺に探しにいく人の姿も。秋元さんによると、被災した漁民は、難を免れたボートをみんなで交代で使っている状況です。

日赤がチリ赤十字社と協議に基づき進めていく復興支援の柱は、①津波被害を受けた漁民の生計支援②地域防災とチリ赤十字社の組織開発――の２つ。生計支援は、住居や家財、ボート、漁具を失った漁民に対してボートと船外機を供与するもので、約1800家族が事業対象です。

高まる復興支援への期待

南半球のチリは季節が日本と逆。「いま人々は春の訪れを楽しみに待っています。春は魚の種類が増え、いろいろな漁も解禁されて、漁民の稼ぎ時。生計支援への期待は高まっています」と秋元さんは伝えます。

こうした思いに応えるため、事業は急ピッチで進行中です。１カ月以内に最初の23隻のボート配付が始められる見通し。日赤としては、ボートと船外機150～170隻を配る予定で、特に零細漁民への配付を優先する考えです。

「被災者の方々はいつまでも援助に頼るのではなく、生業である漁業で生活を立て直したいと願っています。そんな彼らの姿勢に、人間の尊厳を見る思いがし、事業の成功のため頑張る決意がわいてきました」と秋元さんは意欲を語っています。

カニを売っている漁村の人々。地元の人々は地道に復興の道を歩んでいる

シンポジウム「大量破壊兵器禁止と国際人道法」

「無差別攻撃はジュネーブ条約違反」

赤十字国際委員会（ICRC）が強調

イラン・イラク戦争（1980～88年）では、イラク軍による化学兵器攻撃が行われ、イラン人兵士や市民に多くの犠牲者が出ました。この被害者らを招いた国際シンポジウム「大量破壊兵器禁止と国際人道法」（主催＝明治学院大学国際平和研究所、後援＝赤十字国際委員会）が８月３日、同大学内で開催されました。世界の関心が十分に集まらなかった化学兵器被害の実態を明らかにし、大量破壊兵器の禁止につなげていくことがシンポジウムの目的です。

イランの化学兵器「ヒバクシャ」が被害訴え

「イラクが使ったマスタードガスは、がん発症などでいまも被害者を苦しめています。治療法は見つかっていません」

こう語るのは、イランのシャリア・ハテリ医師。自らも戦場で化学兵器を浴びたハテリさんは、医師として被害者治療にあたるかたわら、テヘラン平和博物館の館長として大量破壊兵器の禁止などを訴えています。

８年間にわたるイラン・イラク戦争でイランが受けた化学兵器攻撃は350回。多くの女性やこどもも犠牲になり、いまなお、10万人が治療を受けているといいます。

最も大量に使われた化学兵器がマスタードガスでした。これを浴びると、皮膚には水泡ができ、火傷のようなケロイドが残ります。遺伝子への影響やがんなど長期的な健康被害も特徴です。「何十年も続くマスタードガスの被害は放射能被害と似ています。化学兵器は貧者の核兵器。被害者は『ヒバクシャ』です」とハテリさんは強調します。

マジド・マレザデさんはそんな被害者の一人。「目と皮膚と肺に被害を受けました。もう完治する見込みはないと言われています。残酷で非人間的な兵器が二度と使われない平和な世界を願っています」と訴えました。

原則は兵士と市民との区別

大量破壊兵器と国際人道法との関係については、ICRC軍事顧問のアンドレス・クルージさんが講演。「大量破壊兵器はすべてのケースで国際人道法の原則に違反しています」と強調しました。

講演するアンドレスさん

国際人道法は、ジュネーブ諸条約とその追加議定書、ハーグ条約、国際的な慣習法などで構成されています。アンドレスさんは「ジュネーブ諸条約と議定書の根本原則は、兵士と市民との区別ですから、無差別攻撃はどんな兵器によるものであれ条約違反です。また、化学兵器（※）はそもそもが国際人道法違反なのです」と説明します。

なぜ、化学兵器などの兵器が禁止されるのか。この理由についてアンドレスさんは、①残虐で大変な苦痛を与える②いったん使われるとエスカレートする③使用の際に戦闘員と非戦闘員との区別ができない④軍事標的だけでなく周りの一般市民や民間施設にまで過度の被害を及ぼす――と指摘します。

誰が被爆者を救護するのか？

そのうえで、禁止条約が存在しない核兵器に関しても、化学兵器や生物兵器が禁止されているのと同じ理屈で法律によって禁止されるべきだというICRCのスタンスをアンドレスさんは説明し、こう警鐘を鳴らしました。

「広島が被爆した後、ICRCは駐日要員を派遣し、15トンの医療物資を届けて被爆者救護にあたりました。それができたのは放射能被害を十分に認識していなかったからです。もしいま核兵器が使われたら、赤十字だけでなくどの支援機関もスタッフの安全を考慮して被爆地での救護活動はできないでしょう」

イラン・イラク戦争で使用された兵器がいまだに人々を苦しめている（C）Mehdi Mon'em/ICRC

また、〝第２次世界大戦を終わらせるために日本に原爆を投下する必要があった、原爆を落とさなければ戦争はもっと長引いた〟という議論については、「どんな目的・理由があるにしろ、民間人を巻き込んで多大な苦痛を強いる兵器を使うことは許されない」とICRCの見解を明らかにしました。

◇

※化学兵器については1925年にその使用を禁止する条約ができたが、開発・生産・貯蔵は対象外だった。1993年の化学兵器禁止条約により、開発・生産・貯蔵を含めて禁止された。